常設展示リニューアルへ ―地域再発見事業（特色ある区づくり事業）―

「阿賀北の大地と人々のくらし」公開に向けて準備中!

1968（昭和43）年の開館以来、当館が収集してきた資料は、考古・民俗・歴史・美術などの分野、合わせて４万点を超えています。昨年10月、新潟市北区自治協議会から、それらの資料を有効に活用し、館の名称にふさわしく、かつ北区民の一体感の醸成を目指す博物館の一層の充実が求められました。そのため、博物館の「顔」である常設展示の模様替えを、今年度から３か年かけて特色ある区づくり事業の地域再発見事業として実施することとなりました。

北区は新潟市域では唯一阿賀野川右岸にあり、いわゆる「阿賀北」に属します。江戸時代には新発田藩や水原代官所の支配地でした。また、1954（昭和29）年に旧北地区が新潟市と合併するまで、北蒲原郡西部郷という一つの区域を構成していました。半世紀が経ち、新潟市北区となり、今また新しい歴史が始まりました。こうした特性を活かし、博物館協議会で検討した結果、常設展示のテーマを「阿賀北の大地と人々のくらし」としました。

現在、子供も大人も地域のおいたちや伝統を理解・共有し、北区の魅力を再発見できるような常設展示を目指して準備を進めています。リニューアルは３か年事業ですので、リニューアルオープンは、2016（平成28）年11月３日を予定していますが、平成27年５月２日から、暫定的な状態ではありますが、市民のみなさまに公開いたします。どうぞお楽しみに。

公開をめざして準備作業中の常設展示室

収蔵資料展　和本と学びの世界

北区には多くの歴史資料が残されていますが、そのなかで多くの和本に出合います。現代と同様にさまざまな分野の本が作られ、人々に読まれましたが、区内では、中国や日本の古典の注釈書などの教科書、実用書をよく見かけます。和本は、装訂の意匠も多様で、表紙をめくれば、手書きのもの、木版印刷のもの、挿絵があるものなどバラエティに富んでいます。テレビやインターネットなどで情報が得られる時代ではないので、本というメディアは人々に多くの刺激を与えたことでしょう。

本展では、江戸～明治時代に作られた和本、特に教科書など、学びに関する資料を展示しました。当館の歴史資料を紹介するとともに、当時の子供たちの勉強する姿や、日々の生活を送りながら学びへの意欲を失わない人々の姿などを紹介しました。また、会期中には体験コーナーも設けました。

展覧会会場

<寺子屋の教科書になった和本>の展示コーナー

―収蔵作品公開―　齋藤満栄展

齋藤満栄は、1948（昭和23）年、北蒲原郡葛塚町（現新潟市北区）に生まれ育ち、葛塚中学校３年生の時に新潟県美術展覧会日本画部門において、奨励賞を受賞し注目を集めました。多摩美術大学で新潟出身の横山操に学び、新しい日本画の手法や表現を模索しますが、次第に古典的な日本画表現とその美に傾倒していきます。卒業後は草花の写生に打ち込み、1979（昭和54）年、明治期に創設された日本美術院が主催する院展への入選を果たしました。現在は日本美術院の中心的存在の一人として活躍しています。

当館では豊栄市博物館時代から、この郷土出身の画家の作品を収集してきました。そしてこのたび齋藤満栄氏からのご寄贈により新たに５点が加わり、作家が一貫して追求してきた花鳥画から、目に見えない自然を捉えようと試みた近作まで、画家の表現世界を展観できる８点の充実したコレクションが形成されました。本展では、この８点により齋藤満栄の世界を紹介しました。

展覧会会場